

那覇市農連市場痕跡プロジェクト

参加者：マユミ（22才）

山里先輩！ 憶えていますか？ 高校の後輩のマユミです。

卒業式の時、花束あげたでしょ、1年生の3人組から。本当は私の本命だったんですよ。アトの二人は付け足し。恥ずかしかったから一緒に来て貰ったんです。本気で1年間憧れてたんですから。

ユキコから、先輩がこの「ワナキオ」に出てるって聞いたので、帰ってきたついでに来てみました。でも、誰もいないんだね。

あの時の花束は農連の花屋さんで買ったんだよ。沢山買えてラッピングが豪華で上手っていう評判だったから。

部活の帰りに5人位でラーメン屋さんに入ったこと憶えていますか？ 先輩の隣の席だったから、もうドキドキ。ラーメン屋さんったら、「あっさりにしますか？ こってりにしますか？」なんて聞くんだもん。こってりが食べたいに決まってんじゃない、若いんだから。でも思わず「あっさり」って言っちゃったわよ、あの時は…。

先輩、相変わらず誰にでも優しいんでしょう。私が居るんだからカノジョなんか作っちゃだめだよ。って、これ告知板じゃないよね。「コンセキ」を集めてるんですよ。よーく分かってます。

私の家はこの近所だから、農連の思い出は結構あるんだよ。でも、中学からは私立だったし、やっぱり小学校の時だね、よく通ってたのは。でもあの頃から、川の向こう側、つまりココなんだけど、には来なかったな。

与儀市場から農連を抜けて太平通り、平和通りそして国際通りっていうのが私のコースです。よく歩いてマキシーに行っていました。お気に入りの雑貨屋さんで洋服を見るのが楽しみだったから。

おばあちゃんともよく歩いて通ったよ。おばあちゃんのお目あてはやっぱり山形屋ね。あと、フェスティバルの斜め向かいにあった UCC のコーヒーショップがお気に入り、よく付いていったの。おばあちゃんはそこでたっぷりとミルクとお砂糖をいれて美味しそうにゆっくりとコーヒーを飲むの。私はそこでいつもホットサンドをご馳走して貰うんだ。

ウチは3人兄弟だったけど、おばあちゃんはなぜか出かけるときは必ず私を誘うんだ。末っ子だったからかもしれないけど。お姉ちゃんは、何か、一人でテキパキっていうタイプだし、お兄ちゃんは殆どしゃべらないタイプだったからね。何か聞いても「うん」か「いや」としか言わないもんね。まあ、私を誘ったのも分かる気がする。

そんな感じで、農連のこっち側はよく通っていたんだけど、いざ「コンセキ」っていうとね。一つだけならあるんだけど…。月並みかもしれないけど、犬の足跡です。

その犬の名は宮城ペーチンです。茶色の雑種で、中型犬。放し飼いになっていたけど、ちゃんと首輪に「宮城ペーチン」で名札がついてました。ペーチンって「親雲上」って書くの知ってました？ 国王から数えて6番目位の偉い人の尊称らしいんだけど、私、最近になって初めて知ったの。ずっとマヌケな名前だなと思っていたんです。

だって、ペーチンはあんまり賢そうじゃなかったし、一度なんか黒いマジックインクで眉毛を書かれていたんだよ。それで、私たちは、小学校の帰り道にペーチンに出会うと、笑いながら「ペーチン、ほら、ペーチン」で呼ぶの。自分がマヌケな顔をしているなんて知らずに嬉しそうに近寄ってくるんだよ。

ペーチンは私の通っていた城岳小学校から神原小学校、農連市場一帯のかなり広いエリアをうろついていました。いろんなところで出会うんです。

私の家は本当は与儀小学校の校区だったの。でも、母が交通量の多い与儀の交差点を渡るのを心配して、城岳小学校に行かせたんだ。というのは、私、幼稚園の時、交通事故に遇ってるの。

幼稚園の時の記憶はあんまり無いんだけど、そのことは凄くはっきり憶えてます。交差点を渡ろうとして、5、6歩歩いたところで車がぶつかってきて、私はポウンと空中に跳ね上げられたの。それでくるんと空中で回転して、さっき渡り始める時に立っていたのと同じ場所に立っているのよね。怪我も何もしていなかったの。痛くもなかったわ。周りの大人達は大騒ぎだったけど。

私は、あの、歩いた筈なのに次の瞬間、全く元の場所に戻っていた、あの不思議な感覚が忘れられなくて、みんなにそのことを伝えたいんだけど…。事故のすぐ後は、母親なんか青ざめて、すぐに病院に連れて行かれ、何人ものお医者さんに検査をされたし。みんなそんなこと聞いてもくれないのよ。でも、今考えると運が良かったとしか思えないのよね。

とにかく、そんな理由で、私は与儀小学校じゃなくて、城岳小学校に通っていました。それで、学校の帰りに、友達と道草をしているとよくペーチンと出会ったんです。マヌケだったけど、愛想のいい子でよく遊んでいたの。

農連で出会った時は私一人だったな。ふと気がついたら、ペーチンの方が先に気がついて向こうからやってくるの。ふと目の前を見ると、そこは、コンクリートが打たれたばかりで、まだ乾いていなかったの。あっ、ペーチン、こっち来ちゃだめだよ、って言ったんだけど、嬉しそうにしっぽを振りながら一直線にこっちにやって来て、その生乾きのコンクリートを踏んじやったの。全くドジねえって言いながらランドセルからティッシュを取り出して足の裏を拭いてあげたわ。

こんな感じでペーチンはどこかぬけていたけど、みんなに可愛がられていたの。でも、この少し後に死んじゃったわ。ちょうど私そこに居合わせちゃったの。

開南本通りの仏壇屋の前で、もしかしたら、また私を見つけて飛び出したのかもしれない。運悪く車にはねられちゃったの。ポウンと跳ね上げられたのは私と同じだったんだけど、くるりとは着地できななかったわ。私はもうポカンとしてそこに立っただけ。

自分ではもうそこで記憶が途切れているんだけど、ウチの人たちの話では、私、ワンワン大泣きして大変だったんだって。でも、自分では泣いた記憶が全くないのよ。あんたも、あの、歩いていて突然次の瞬間に元の所に立っている、あの不思議な感覚を味わったのって、ペーチンに確かめていたような気がしてたの。あの感覚を唯一共有できたのかなって。

今思うと…、ペーチンは自分の運を私に呉れて、それで私は無事だったのかもしれないな—って思うことがあるんだ。この足跡を見ると時々そう思うの。

